国際的観光地形成のための公共空間の評価技術に関する研究

研究予算：運営費交付金（一般勘定）
研究期間：平 27～平 30
担当チーム：地域景観ユニット
研究担当者：笠間聡、松田泰明、小栗ひとみ、吉田智

【要旨】
国内におけるさらなる観光の振興のためには、観光地としての魅力向上が欠かせない。本研究では、魅力的な観光地の条件を屋外公共空間の面から明らかにすることで、各観光地における課題抽出や公共空間の整備・改善手法の立案を支援し、さらには日本全国における国際的観光地形成に寄与することを目的としている。
このため、平成 27 年度については、国内の徒歩圏規模の温泉街型観光地について事例調査を行い、その共通点の抽出などを通じ、観光地の魅力向上に寄与する屋外公共空間のあり方（「パターン」）に関して分析を行った。これらの調査研究の概要と、結果として抽出された 6 つの「パターン」について、以下に報告を行う。

キーワード： 観光地、観光振興、魅力向上、屋外公共空間、景観形成、パタンランゲージ

1. はじめに

1.1 研究の背景

観光立国の実現は我が国の重要な政策課題のひとつであり、「観光立国推進基本計画」（平成 24 年 3 月 30 日閣議決定）[1] においても、「国内外から選好される魅力ある観光地域づくり」が主な施策（4 項目）のひとつとして挙げられている。平成 28 年 3 月に「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」（議長：安倍晋三内閣総理大臣）が発表した「明日の日本を支える観光ビジョン」[2] でも、「景観の優れた観光資産の保全・活用による観光地の魅力向上」が掲げられている。

また、国土交通省北海道局の「北海道開発の将来展望に関するとりまとめ」[3] でも、訪日外国人旅行客の約 1 割を担う北海道の現状を踏まえ、インバウンド観光の振興の推進が政策課題として挙げられているほか、地域の観光産業の振興は、政府の「地方創生」の理念とも合致するものである。

そのような中、観光振興や観光地としての魅力向上、特に近年課題となっている滞在型観光の促進や観光地における滞在時間の向上を考える上で、景観・空間（屋外公共空間（民地も含む））の質や機能は重要である [4]。

しかしこの点で、日本の観光地は海外の観光地に大きく見劣りし、実行されている改善の取組みの面でも効果的でない事例が散見される。

写真-1　研究の対象とする「観光地の屋外公共空間」のイメージ(一例)

このため、「世界に通用する魅力ある観光地域づくり」やそのための「良好な景観形成など観光振興に資する技術研究開発の推進」が現在求められており [5]、そのために観光地の効果的・効率的な魅力改善を支援していくことが必要とされている。

1.2 研究の目的と研究計画

本研究の目的は、滞在型観光を念頭に、魅力的な観光地の条件を屋外公共空間（外部公共空間）の面から明らかにすることで、その課題の抽出や整備・改善手法の立案を支援し、日本全国における国際的観光地形成に寄与することである。

このために平成 27～30 年度の計画で、以下のよう

な研究に取り組むこととしている。

① 国内外の観光地の事例調査等を通じ、外部公共空間の魅力向上に寄与する要素・要因の抽出及び分析を行う。
② ①の結果に基づき、評価の高い（低い）外部公共空間に共通する「パターン」の整理・体系化を行う。
③ ①や②の結果を基に、観光地の魅力向上や課題抽出に資する外部公共空間の評価手法を確立する。
④ 観光地における魅力的な外部公共空間の創出を支援する技術資料の取りまとめを行う。

平成 27 年度については、このうちの①および②について研究を進める計画としており、本稿ではこの結果について、2.章以降に報告する。

1.3　屋外公共空間（外部公共空間）

本研究でいう「屋外公共空間」とは、観光地の屋外（外部）空間のうち、その土地の所有者に関わらず、パブリック、すなわちその土地を訪れる観光客が一般的に利用することができる空間及びそこから見通せる範囲を指すこととしている。

したがって、公共の所有する道路や公園、広場はもちろんこれに含むが、公共の所有でも一般にアクセスすることができない立入制限区域等は含まない。他方、企業や個人の所有する土地であっても、自由に立ち入ることのできる敷地の部分はこの「屋外公共空間」に含み、さらには建物の壁面や屋根の意匠、柵や窓の向こう側などパブリックな敷地の部分から見通せる範囲も含むものとしている（前掲写真-1）。

2. 平成 27 年度の研究実施内容

研究初年度にあたる平成 27 年度については、1.2 節の①及び②に対応するものとして、主に国内の温泉街型の観光地を対象として 2.3 節に示す調査と分析を行った。

これに関連し、平成 27 年度研究の対象とした「観光地」の規模や形態について 2.1 節に、このうちでも温泉街を研究の対象とした理由を 2.2 節に示す。

2.1　調査分析の対象とした観光地の規模

観光地、観光スポット、観光圏などの言葉が示すように、観光地の単位は小さなものから大きなものまで様々ある。ただし、観光地として考える単位が大きくなればなるほど、そこには多様な要素が入り込むこととなり、分析が複雑になる。一方で公共の空間を研究の対象とする立場からは、単独の観光スポットだけを研究の対象とすることは不適当である。

このようなことを考慮し、本研究では徒歩で回る規模を観光地の単位として考えることとし、おおよそ直径 1km 程度のまとまりで考えた。加えて、そのような観光地の単位が連担したり、互いに影響を及ぼし合うと、観光地の魅力評価が観光地外の要因に影響をうけることとなり、分析の支障となる。

そこで、平成 27 年度については、比較的独立性の高い観光地を研究の対象とすることとした。したがってパリや神戸、横浜のような規模が大きく複数の観光エリアが連担するような都市型の観光地は当面の研究の対象とせず、山あいの温泉街や集落のような観光地を研究の対象とする。

2.2　温泉街型観光地を調査対象とした理由

前述の観光地の規模の考え方を踏まえた上で、平成 27 年度研究においては、「温泉街型」の観光地を調査分析の対象とした。これは以下の理由による。

・類似の観光地が全国に多く分布している。
・本研究で考える「観光地」の形態に近い、徒歩圏規模の独立性の高い集落形状を成しているものが多数ある。
・観光行動上、「物見」よりも「滞在」に重点が置かれており、個別の「物見」の対象（例えば文化財や歴史的資源など）の有無や良し悪しに観光地の評価が影響を受けにくい。
・類似の観光地間での客観的・相対的な魅力評価が広く実施されており（民間調査会社の全国人気温泉地ランキングなど）、評価の高い観光地の抽出が既存資料を利用して行える。

2.3　平成 27 年度研究の概要

以上を踏まえ、平成 27 年度については、徒歩圏規模の温泉街型観光地を対象として以下の調査を行った。

①評価の高い全国の温泉街型観光地 6 事例の事例調査、②それら観光地に共通する観光客の観光行動や屋外公共空間の「パターン」の抽出、③それら「パターン」と各観光地の現状の比較に基づく、パターンの妥当性の検証と観光地の評価・分析の試行、で

ある。

2.4　C.アレグザンダーの「パターン」

前節で用いた「パターン」とは、C.アレグザンダーが著書「A Pattern Language」[6] にて示した「パターン」の概念を指す。建築家・都市計画家であり研究者でもあるアレグザンダーは、具体の建築や都市の洞察・研究・実践を通じ、同著書で理想的なまちや建築の姿の断片を 253 の「パターン」という形で提示した。

本研究でも、アレグザンダーの手法同様、具体の事例の分析から "共通点" を抽出し、これを "魅力的な滞在型観光地に求められる要件の候補" として検討するという同様のアプローチを採用することから、ここでも「パターン」の語を用いている。

3.　観光地の事例調査

3.1　調査対象とした観光地と調査の方法

前述のとおり、国内の 6 の温泉街型観光地を対象とした現地調査およびヒアリング調査を行い（**写真-2**）、屋外公共空間の現状や観光客の観光行動の特徴について把握を行った。

本調査で調査対象とした温泉街型観光地は、**表-1**

写真-2　現地調査およびヒアリング調査の状況

表-1　調査対象とした温泉街型観光地

名称	所在地	人気温泉地ランキング ※	ミシュラン グリーンガイド 2012 ※※	ことりっぷ(株式会社 昭文社) 刊行状況　「　」内は刊行タイトル
A. **黒川温泉**	熊本県阿蘇郡南小国町	1	★★	○「由布院・**黒川温泉**」
B. **由布院温泉**	大分県由布市	3	★★	○「**由布院**・黒川温泉」
C. **有馬温泉**	兵庫県神戸市	13	○	△「神戸」
D. **城崎温泉**	兵庫県豊岡市	6	-	○「**城崎温泉**・出石・豊岡」
E. **加賀山中温泉**	石川県加賀市	15	-	△「金沢」
F. **野沢温泉**	長野県下高井郡野沢温泉村	-	★★	△「小布施・長野・戸隠・湯田中渋温泉」

※ じゃらん人気温泉地ランキング2015（株式会社リクルートライフスタイル）を元に，筆者らにて独自に「もう一度行ってみたい」の回答数を，「最近1年間に行ったことがある」の回答数で除したランキングを作成して表示.

※※ 2つ星(★★)の温泉街は全国で9カ所，1つ星(★)は7カ所，星なし(○)は7カ所，計23カ所.

表-2　現地調査およびヒアリング調査の実施概要

名称	現地調査	ヒアリング調査	
A. **黒川温泉**	11/23(月), 25(水)	南小国町：まちづくり課 黒川温泉観光旅館協同組合	11/24(火) 9:00 11/23(月) 11:00
B. **由布院温泉**	11/22(日), 23(月), 24(火)	由布市：由布院庁舎 商工観光課　観光係 由布院温泉観光協会	11/24(火) 13:00 11/24(火) 11:00
C. **有馬温泉**	12/4(金)	神戸市：観光コンベンション部 観光コンベンション課 有馬温泉観光協会 有馬温泉旅館 陶泉御所坊：主人 金井啓修氏	2/ 9(火) 16:00 12/ 4(金) 13:00 2/ 9(火) 13:00
D. **城崎温泉**	12/5(土), 12/6(日)	豊岡市：城崎振興局地域振興課 城崎温泉観光協会	12/ 7(月) 9:30 12/ 7(月) 11:00
E. **加賀山中温泉**	12/8(火)	加賀市：山中温泉支所振興課 山中温泉観光協会	12/ 8(火) 9:30 12/ 8(火) 11:00
F. **野沢温泉**	12/9(水)	野沢温泉村：観光産業課 野沢温泉観光協会	12/ 9(水) 11:00 12/ 9(水) 9:30

※現地調査日時のうち、下線の日程が、主たる調査日。

の 6 観光地であり、全国における近年評価の高い温泉街の中から、2.1 節の条件に合致するものを選定した。なお、これらの選定にあたっては、海外発行の世界的観光ガイド誌における評価[7]や、国内民間調査会社の人気温泉地ランキング[8]、女子旅向けの観光ガイド誌[9]の刊行範囲などを参考としている。

調査は、11 月下旬～12 月上旬にかけて実施し、紅葉の終わりかけ時期であった。現地調査・ヒアリング調査の日程および調査先を表-2 にまとめる。

3. 2　調査内容

屋外公共空間の調査にあたっては、あらかじめ調査対象とする屋外公共空間の範囲をある程度絞り込む必要がある。そこで今回の現地調査では事前に、主要な観光スポットや公共交通機関のターミナルの位置、各種の観光案内等に基づいて、観光客の代表的な観光行動のモデル化を行い、それをもとに主要な徒歩観光ルートの抽出を行った（図-1 および図-2 に一例）。その上で、その徒歩観光ルートに沿って現地調査を行い、屋外公共空間の現状や観光客の観光行動について把握を行った。

次節以降に、各温泉街の概要や、いくつかの温泉街については設定したモデル的な徒歩観光ルートとその位置などを整理する。

3. 3　調査結果の概要

3. 3. 1　黒川温泉

阿蘇の山間の田の原川沿いに、30 軒ほどの比較的小規模な温泉旅館が寄り添う、山間のひなびた雰囲気が人気の温泉街である（写真-3）。

土産物屋や茶屋が並ぶ川端通り（写真-3 左）と、1 本上のさくら通り（旧小国街道）が徒歩観光のメインであるが、土産物屋が建ち並ぶエリアは、立ち寄りを除くと 10 分程度で一周できる規模でこじんまりとしている。

3. 3. 2　由布院温泉

大分県由布市、由布院盆地の豊かな田園の中に立地する温泉街である（写真-4）。由布院温泉の名前を冠する温泉宿自体は、由布院駅を中心とする半径 2km 程度の範囲に広がっているが、今回の調査では、由布院駅から金鱗湖までの市街地部分を温泉街として扱う。

徒歩観光ルートは、由布院駅から由布岳に向かって伸びる由布見通りと、そこから分岐する湯の坪街道（写真-4 左）が骨格で、宿泊施設や店舗の集積は金鱗湖までのエリアに広がる。

3. 3. 3　有馬温泉

兵庫県神戸市の山間、六甲山の裏側に位置し、関

写真-3　黒川温泉

写真-4　由布院温泉

写真-5　有馬温泉

写真-6　城崎温泉

写真-7　加賀山中温泉

写真-8　野沢温泉

西の奥座敷とも呼ばれる古くからの温泉街である（**写真-5**）。山間の狭い土地に立地することもあり、温泉街は半径 500m 程度の範囲に収まる規模である。

徒歩観光ルートの骨格は太閤橋から「湯本坂」のエリアであり、「湯本坂」では歴史的な雰囲気の温泉情緒にあふれた街並みが形成されているが（**写真-5** 左）、これらは温泉街の有志の先導により近年になって整備されたものである。

3. 3. 4　城崎温泉

兵庫県豊岡市に立地する温泉街（**写真-6**）。

城崎を代表する風景である大谿川沿いの石垣、石橋、柳並木、3 階建ての木造旅館といった街並み（**写真-6** 左）は、1925 年北但馬地震の復興により整備されたものとされる。各旅館で内湯を作らないことを旧来からの取り決めとしており、7 カ所整備された外湯をめぐるのが城崎の楽しみ方となっている。

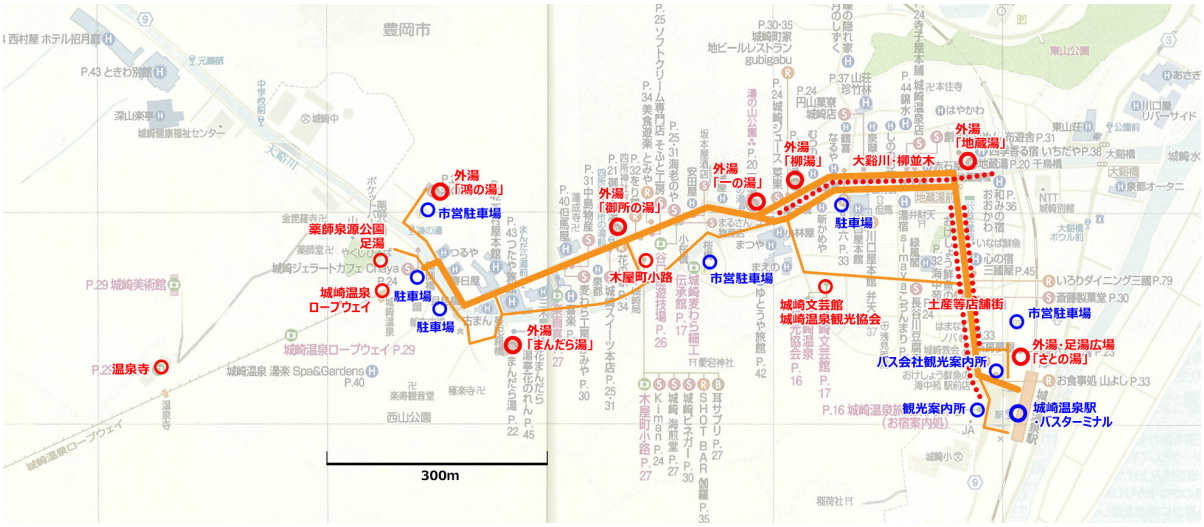

図-1　城崎温泉で設定した主要徒歩観光ルート

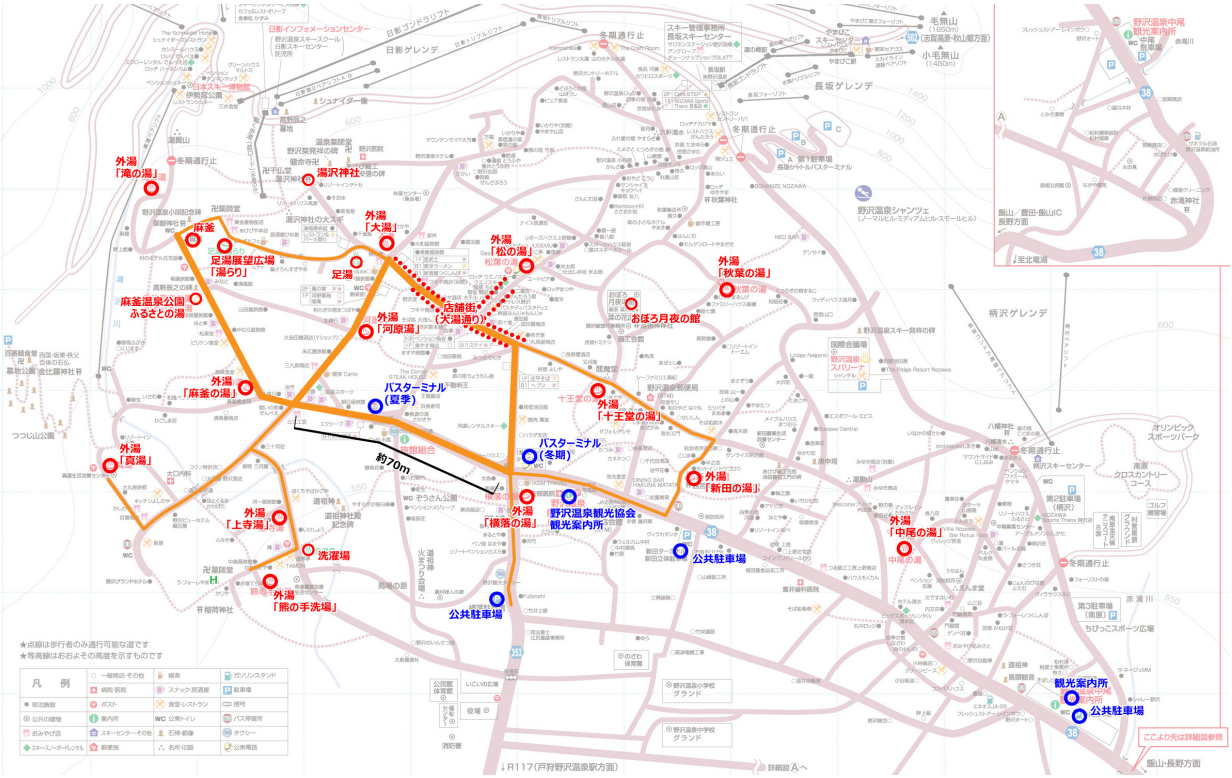

図-2　野沢温泉で設定した主要徒歩観光ルート

温泉街は、城崎温泉駅から北西方向に大谿川のつくる谷間に沿っておおよそ 1km ほどの広がりをもつ。このエリアに先の 7 つの外湯が点在しており、徒歩観光ルートも外湯の立地する範囲にほぼ一致する（図-1）。

3. 3. 5　加賀山中温泉

石川県加賀市に位置する温泉街で（写真-7）、同じ加賀市の片山津温泉などとあわせて加賀温泉郷と総称される。

共同浴場「菊の湯」がまちの中心であり、ここから南西に伸びる「ゆげ街道」（写真-7 左）が現在の徒歩観光ルートの骨格となっている。ゆげ街道は 2003 年完成にて拡幅整備された通りで、その際に街並みの景観整備が行われている。これに並行するのが大聖寺川と鶴仙渓で（写真-7 右）、鶴仙渓の散策も古くから人気がある。

3. 3. 6　野沢温泉

長野県野沢温泉村に位置する温泉街で、共同浴場「大湯」のあたりを中心に、半径 300m ほどの範囲に多くの温泉宿や飲食店が密集している（写真-8）。

観光客にも開放された 13 カ所の共同浴場（外湯）が特徴で、近年は冬場のスキー時期には欧米からのスキー客で大変な賑わいをみせる。網の目状に張り巡らされた街路に旅館や店舗が建ち並んでいるため、代表的な徒歩観光ルートを設定することが難しいが、ここでは公共駐車場や観光案内所、麻釜や大湯などの野沢を代表する施設の立地をもとに、図-2 のようにルートを設定し、現地調査を行った。

4.　評価の高い温泉街型観光地の「パターン」の抽出

3.章に概要を紹介した調査対象の 6 観光地は、前述のとおり、全国的にも比較的高い評価を得ている観光地である。

したがって、これらの観光地の共通点を探し出すことで、魅力的な滞在型観光地に求められる要件について示唆を得ることができると考えられる。以下で議論するこれらの ”共通点”、すなわち”魅力的な滞在型観光地に求められる要件の候補” を、前述(2.4 節)のとおり C.アレグザンダー[6] にならって「パターン」と呼ぶ。

3.章の調査から抽出された共通点（「パターン」）は 4.1 節～4.6 節に示したとおりである。以下ではこれらの各項目について、今回調査を行った 6 観光地の事例等をもとに詳述する。

4. 1　屋外での時間の過ごし方の提供

調査対象とした 6 観光地では、観光客・宿泊客の散策・街あるきが盛んであった。他方、国内の観光地には来訪者に散策や回遊を促すのに苦心している観光地も少なくない。では、今回調査対象とした 6 観光地を訪れる人々は、どのような理由・目的で散策を楽しんでいるのであろうか？

このような視点で各観光地を見てみると、散策や回遊のきっかけとして、観光地の側から屋外に繰り出す理由や目的がしっかりと提供されていることが明らかとなった。

例えば、A.黒川温泉では 1986 年から「入湯手形」の取組み[10] が行われ、結果として観光客は徒歩による露天風呂巡りを楽しんでいる。D.城崎温泉でも各温泉宿に内湯を作らないことで外湯めぐりを促す取組みが旧来から行われており、F.野沢温泉でも 13 ある無料の外湯（共同浴場）が観光客にとって外に繰り出す理由となっている。

E.加賀山中温泉で近年はじまった鶴仙渓の川床も、鶴仙渓を訪れる意欲を高める効果をもたらしていると考えられる。B.由布院や C.有馬では特段の取組みは行われていないが、それぞれ湯の坪街道や湯本坂の店舗の集積が観光客を誘う要素となっている。

これらをまとめたのが表-3 である。ここでは、地域として屋外での時間の過ごし方を積極的に提案・提供している A.黒川、D.城崎、E.加賀山中、F.野沢を○以上とし、地域としての取組みは行われていない B.由布院と C.有馬を△と評価した。

4. 2　観光地のアイデンティティとなるような象徴景

ピクチャレスクな、その観光地に特有の象徴的な

表-3　各観光地における「屋外での過ごし方の提供」の現状

名称	屋外での時間の過ごし方の提供	
A. 黒川温泉	◎	入湯手形システム
B. 由布院温泉	△	- 湯の坪街道の店舗の集積
C. 有馬温泉	△	- 湯本坂・太閤通りの店舗の集積
D. 城崎温泉	◎	外湯めぐりシステム
E. 加賀山中温泉	○	鶴仙渓の川床・遊歩道
F. 野沢温泉	◎	外湯(13カ所の共同浴場)

風景は、観光地のアイデンティティを強め、観光客にいつか訪れたいという想いを与え、また現地でその風景を目にすることで当該観光地を訪れたという達成感を強めるといった効果があると考えられる。

今回調査した 6 観光地では、各観光地に関する観光案内や観光ガイド誌、各種のウェブサイト等の、表紙、扉ページなどから抽出することで、**表-4** および**写真-9** に示すような各観光地を代表する象徴景が確認できる。

ただし、B.由布院の大分川と由布岳の風景（**写真-9(c)**）や E.加賀山中温泉の鶴仙渓（**写真-9(g)**）では、街並み等が風景の中に含まれておらず、温泉街への滞在のイメージがつかみにくいように思われる。また、B.由布院の湯の坪街道の風景（**写真-9(b)**）は、観光協会などの公式のウェブページ等では採用がみられない。これらのことから**表-4** では、B.由布院と E.加賀山中について△と評価している。

4. 3　豊かな自然と一体化した街並み

今回調査した多くの観光地では、観光地の周囲に山林や農村などの豊かな自然環境があり、観光地の中核からもそれらを見通すことができたり気配を感じたりすることができるようになっている。さらに、観光地の内部には、それらの自然環境とつながりのある要素（植栽や河川など）がちりばめられ、街並みと周辺の自然環境の一体感が演出されている。

これらについて、ここでは**表-5** に示したように、観光地から眺望できる周囲の自然環境を遠景要素、観光地の主要観光ルートなどに沿った街なかの植栽や水面を近景要素として、この 2 つの観点から評価することとした。

A.黒川温泉の街路や B.由布院の湯の坪街道には、沿道の民地の至る所に雑木の植栽があり、遠景への

表-4　各観光地における「観光地のアイデンティティとなるような象徴景」の現状

名称	アイデンティティとなるような象徴景	・象徴景の構成	・掲載例
A. 黒川温泉	○	丸鈴橋からの田の原川と旅館(ふじ屋)	観光ガイド誌，Wikipedia
B. 由布院温泉	△	湯の坪街道	※ 公的なウェブサイトやガイドでは，由布院の代表景としての扱いは少ない
		大分川と由布岳 ※街並みは含まれない	由布院温泉観光協会
C. 有馬温泉	○	太閤橋からの六甲川とねね橋･旅館群･六甲の山々	Wikipedia
		金の湯と湯本坂	Wikipedia
D. 城崎温泉	○	大谿川沿いの石橋，柳並木，木造旅館の風景	城崎温泉観光協会，Wikipedia
E. 加賀山中温泉	△	鶴仙渓（川床） ※街並みは含まれない	山中温泉観光協会web，観光ガイド誌
F. 野沢温泉	○	共同浴場「大湯」	野沢温泉観光協会web，観光ガイド誌
		「麻釜」	観光ガイド誌

(a) 黒川
丸鈴橋の風景

(b) 由布院 / 湯の坪街道

(c) 由布院 / 大分川と由布岳

(d) 有馬 / 太閤橋から

(e) 有馬 / 金の湯

(f) 城崎
大谿川と柳並木

(g) 加賀山中
鶴仙渓

(h) 野沢 / 大湯

(i) 野沢 / 麻釜(おがま)

写真出典
(a)　Wikipedia
(b)　TripAdvisor
(c)　由布院温泉観光協会
(d)　神戸刊行壁紙写真(webサイト)
(e)　Wikipedia
(f)　城崎温泉 若旦那の会
(g)　山中温泉観光協会
(h)　find-travel.jp
(i)　find-travel.jp

写真-9　各観光地における「観光地のアイデンティティとなるような象徴景」の例

眺望と併せ、周囲の山林の環境が温泉街に取り込まれている。

C.有馬温泉やD.城崎温泉、E.加賀山中温泉でも、街並みの背後にはすぐ里山が迫り、それぞれ六甲川沿いや大谿川沿い、ゆげ街道などの開けた空間からはこれらを見通すことができる。あわせて、D.城崎温泉・大谿川沿いの柳並木やE.加賀山中温泉・ゆげ街道の雑木風の街路樹、C.有馬温泉の要所に植えられた季節感のある樹木などが、これらの里山の雰囲気を街中に引き込む装置として機能している。

F.野沢温泉は同じく山に囲まれた環境ではあるが、建物の密度が高いこともあり、**図-2** で設定した徒歩観光ルートからはこれらを見通せるところが限られ、足湯広場「湯らり」などの高台に登らないと十分に感じることができない。

これらのことから**表-5** では、F.野沢温泉のみを×評価とし、残る5観光地を○評価としている。

4.4　景観に優れた適度な長さの散策路

今回調査対象とした観光地の多くでは、景観に優れた環境の中を、ゆっくりと散策できる環境が整っていた。代表的なものは、湯冷ましのそぞろ歩きに適した黒川や城崎の環境である。

まちづくりや観光地づくりの取組みでは、散策や回遊を促す取組みが盛んであるが、観光客にとって、せっかく散策するのであれば日常とは異なるその地ならではの世界観のある空間であることが望まれると考えられる。このためには、その世界観に没頭するため散策路にはそれなりの延長が必要となるし、世界観を演出するだけの景観的な統制が必要となる。

このような散策路について、各温泉街での存在の有無を取りまとめたのが**表-6** である。

表-5　各観光地における「豊かな自然と一体化した街並み」の現状

名称	自然景観の取り込み	・近景	・遠景
A. 黒川温泉	○	民地の雑木	周囲の里山との一体感
B. 由布院温泉	○	民地の雑木	由布岳への見通し
C. 有馬温泉	○	要所の庭木	六甲の山々への見通し
D. 城崎温泉	○	大谿川の柳並木	周囲の山並みへの見通し
E. 加賀山中温泉	○	ゆげ街道の雑木風街路樹	周囲の山並みへの見通し
F. 野沢温泉	×	沿道に建物がびっしり張り付き，沿道の植栽や，周囲の山々との一体感に乏しい.	

A.黒川温泉では温泉街全体で、雑木に囲まれた山里の風景が演出されており、温泉街のメインストリートにあたる川端通り（**写真-3** 左）と旧小国街道（さくら通り）を通って丸鈴橋を起終点として約600m、立ち寄りを除いても15分程度の散策が楽しめる。

B.由布院温泉では、湯の坪街道（約700m）が散策路の骨格となっている。一時期は過度な商業主義による景観的な混乱もあったとのことだが、近年は景観計画や景観協定を通じて景観への配慮が行き届き、落ち着いたたたずまいが演出されている（**写真-9(b)**）。ただし由布院駅から金鱗湖まで歩いて往復すると3kmを超える距離になってしまい、行きと帰りで同じルートを歩かねばならないことを含め、徒歩で歩くのにはやや過大である。

C.有馬温泉では、湯本坂の界隈に温泉街の情緒を感じさせる店舗や旅館、寺院などの集積があり（**写真-5** 左）、一周で約1kmの散策を楽しめる。

D.城崎温泉では、大谿川の水面と石垣と石橋、川沿いの柳並木、木造旅館の街並み、街並みのすぐ背後に迫る里山の風景が、湯冷ましのそぞろ歩きにぴったりの風景をつくっている（**写真-6** 左）。地蔵湯～一の湯までの核心的な区間は300mほどと物足りない距離であるが（**図-1**）、草履履きで歩調がゆっくりになるのに加え、これ以外の界隈も街並み景観的には調和が図られており、外湯もより広範なエリアに点在しているので界隈全体では一度には歩ききれないほどの規模となっている。

E.加賀山中温泉では、鶴仙渓とゆげ街道のダブルルートとなっており、鶴仙渓をあやとり橋からこおろぎ橋までで 800m。ゆげ街道を歩いて山中座・菊の湯まで戻ってきて700mほど、計1.5kmとほどよ

表-6　各観光地における「景観に優れた適度な長さの散策路」の現状

名称	景観に優れた適度な長さの散策路	・散策路名称	・散策路延長
A. 黒川温泉	○	川端通り～旧小国街道(さくら通り)～丸鈴橋	約600m / ループ
B. 由布院温泉	○	湯の坪街道	約700m / 片道
C. 有馬温泉	○	六甲川沿い（太閤橋～ねね橋）～太閤通り～湯本坂	約1km / ループ
D. 城崎温泉	○	城崎温泉駅～地蔵湯 大谿川沿い（地蔵湯～一の湯） 一の湯～御所の湯～鴻の湯・温泉寺	約300m / 片道 約300m / 片道 約600m / 片道
E. 加賀山中温泉	○	鶴仙渓（あやとり橋～こおろぎ橋） ゆげ街道（こおろぎ橋～菊の湯）	約800m / 片道 約700m / 片道
F. 野沢温泉	×	景観に特に優れた散策路は存在しない	

い距離である。鶴仙渓では遊歩道や川床などの整備が行き届いた自然散策が楽しめる（**写真-7** 左）。ゆげ街道では街路の拡幅整備にあわせて街並み整備が行われているため、統一された街並み景観の中、土産物屋めぐりを楽しめる（**写真-7** 右）。

F.野沢温泉では、外湯と呼ばれる共同浴場を巡るルートが散策ルートといえるが、野沢のシンボルでもある「大湯」を中心に網の目状に温泉街が広がっており、骨格が明確でない（**図-2**）。建物の規模と色彩が揃っているために全体の街並みに調和が感じられるものの、景観的に特に優れているというほどではない（**写真-8** 右）。

以上を踏まえ、**表-6** では、F.野沢温泉のみ×とし、他の 5 観光地を○評価とした。

4. 5　散策や滞留の拠点となる広場等

歩く、店や観光施設を訪ねる、以外の時間の過ごし方を提供するのが、大小の広場や展望・休憩スペースである。これらの広場等がまちの中核や風景上のハイライトにあると、休憩や写真撮影、これまでの風景体験のおさらいや振り返り、今後の観光行動の計画などに利用することができ、観光がより充実したものになると考えられる（**表-7**、**写真-10**）。

A.黒川温泉では、温泉街のほぼ中央に位置する、田の原川にかかる丸鈴橋とそれに隣接する緑地がこのような拠点となっており、しばしたたずみ、写真を撮影したり地図を広げたりする人が確認できる（**写真-10(a)**）。

B.由布院温泉では、金鱗湖（**写真-10(b)**）と由布院駅前が唯一ゆっくり滞留できる場所であるが、いずれもまち外れの位置にあり、散策の起終点ではあるものの拠点的な位置づけは若干弱い。散策のメインである湯の坪街道からも離れている。

C.有馬温泉では、六甲橋にかかるねね橋や金の湯の足湯広場がこのような拠点となっている（**写真-10(c)**および**(d)**）。

D.城崎温泉では、城崎のシンボルである大谿川と外湯が結びついた地蔵湯前の地蔵湯橋が拠点となる（**写真-10(e)**）。また、城崎温泉の駅前にはさとの湯の足湯広場があり、鉄道の時間待ちなどに、疲れを癒やしたり余韻に浸ったりができる空間を提供している（**写真-10(f)**）。

E.加賀山中温泉では、菊の湯・山中座前の広場がその位置を占める（**写真-10(g)**）。

F.野沢温泉では、野沢のシンボルでもある麻釜と

表-7　各観光地における「散策や滞留の拠点となる広場等」の現状

名称	散策や滞留の拠点となる広場	
A. 黒川温泉	○	丸鈴橋(川端通り)・隣接の緑地
B. 由布院温泉	△	金鱗湖 ※散策ルートの終点
C. 有馬温泉	○	ねね橋
D. 城崎温泉	○	さとの湯足湯広場(駅前) 地蔵湯前広場・地蔵湯橋 ロープウェイ前足湯広場 ※散策ルートの終点
E. 加賀山中温泉	○	菊の湯前広場
F. 野沢温泉	△	足湯広場「湯らり」※散策ルートの終点

(a) 黒川 / 丸鈴橋のたもと　**(b) 由布院** / 金鱗湖
(c) 有馬 / ねね橋のたもと　**(d) 有馬** / 金の湯足湯
(e) 城崎 / 地蔵湯橋・地蔵湯前広場　**(f) 城崎** / さとの湯・足湯広場
(g) 加賀山中 / 山中座・菊の湯前広場
(h) 野沢 / 麻釜(おがま)　**(i) 野沢** / 足湯広場湯らり

写真-10　各観光地に認められる「散策や滞留の拠点となる広場等」

その周辺に整備された足湯広場が温泉街を一望できる高台にあるが、まち外れの位置にあり、拠点的な位置づけは弱い（写真-10(h)および(i)）。

以上を踏まえ、表-7 では、拠点的な立地に劣るB.由布院温泉と F.野沢温泉を△とし、残る 4 観光地を○評価としている。

4.6　歩行者優先の街路空間

歩いて観光する観光客にとって、自動車は危険と騒音の素といえる。モータリゼーションの時代以降、人々の生活環境と自動車交通とは分離が図られるべきだと再三にわたり言われてきたように[11]、自動車を意識せずに歩ける空間がまちの中核にあることは、観光を阻害されることを避ける意味でも大変重要である。

これらの歩行者優先の街路環境についてまとめたのが表-8 である。

A.黒川温泉のメインルートである川端通りと、C.有馬温泉の湯本坂は、幅員が 3m 前後と極端に狭く、結果として車の進入しにくい環境をつくり歩行者優先の街路空間となっている。

D.城崎温泉の大谿川沿いや F.野沢温泉の街中も、車がすれ違うのに十分な幅員がないため、結果として車の走行速度が抑えられ歩行者は車を必要なときだけ避ければよい環境となっている。

E.加賀山中温泉のゆげ街道は歩車が明確に分離され、植栽帯もあって、車を気にせず歩ける環境が確保されている。

B.由布院の湯の坪街道は、観光客であふれ返っており、道路の幅員めいっぱいを歩行者が占拠し、結果として歩行者優先の環境となっている。ただし、自動車の往来がそれなりにある中で、自動車と歩行者の離合が困難なほどに混雑していることから、歩行者にとっては自動車が通行するたびに散策の中断が求められる状況にはある。

表-8 では、上述のように歩車の離合の問題はあるものの、いずれの観光地にも歩行者優先の環境が確認できたことから、6 観光地すべてを○評価とした。

5.「パターン」を用いた観光地の評価･分析の試行とパターンの妥当性に関する考察

次に、4.章で指摘した 6 つのパターンについて、いくつかの観光地をモデルケースに用いてその適合の状況を調査し、観光地の評価・分析の試行を行うとともに､パターンの妥当性に関する考察を行った。

モデルケースとして用いたのは、北海道内の徒歩圏規模の温泉街型観光地として登別、洞爺湖、阿寒湖、定山渓、層雲峡の各温泉街と、温泉街型ではない徒歩圏規模の観光地として小布施修景地区（長野県小布施町）である。

以下には、このうち、洞爺湖と小布施を対象とした調査結果について紹介する。

5.1　洞爺湖温泉：北海道洞爺湖町

洞爺湖温泉は北海道でも著名な温泉街のひとつで、支笏洞爺国立公園内の洞爺湖畔に位置し、規模の大きな高層のホテル群が建ち並ぶ市街地状の街並みを成している。3.章の表-1 に示した人気温泉地ランキングの順位は 9 位である。ミシュラングリーンガイド 2012 には掲載がなく、表-1 に示した旅行ガイド誌は刊行されていない。

北海道内の徒歩圏規模の独立性の高い温泉街としては、洞爺湖のほかに、阿寒湖、登別、定山渓、層雲峡などが考えられるが、ここでは温泉街の規模などを考慮して洞爺湖温泉を選んだ。

洞爺湖温泉について、4.章で示した 6 つのパターンとの適合を調査した結果を以下に示す。

表-8　各観光地における「歩行者優先の街路空間」の現状

名称	歩行者優先の街路空間	・街路空間名称	・幅員構成	・自動車交通
A. 黒川温泉	○	川端通り 旧小国街道(さくら通り)	幅員3m程度 幅員6m程度	通り抜けも難しい幅員でごく少ない. それなりにある（沿道に公共駐車場）
B. 由布院温泉	○	湯の坪街道	幅員4m程度	それなりにある.
C. 有馬温泉	○	湯本坂	幅員3m程度，一方通行	通り抜けも難しい幅員でごく少ない.
D. 城崎温泉	○	大谿川沿い	幅員6m程度 (柳並木により有効は4～5m程度)	それなりにある.
E. 加賀山中温泉	○	ゆげ街道	歩車分離，植栽帯 歩道3m＋車道6m＋歩道3m	並行する国道がバイパスとして機能し， 都市間の通過交通は排除されている.
F. 野沢温泉	○		幅員4m程度	幅員4m程度

5. 1. 1　屋外での時間の過ごし方

特に用意されていない。湖畔の遊歩道沿いに彫刻が点在して置かれているものの、これを目的に散策するほどのものでもない。湖畔の遊歩道に面して、屋外で食事や飲食をできる空間があれば、ゆっくりとした時間を過ごせるものと考えられるがそのようにはなっていない。

5. 1. 2　観光地のアイデンティティとなるような象徴景

湖畔の遊歩道から洞爺湖を眺める風景がひとつにはあるが、そこには温泉街の街並みなどは写り込んでおらず、当該観光地で得られる滞在体験をイメージできるものとはなっていない（写真-11）。

5. 1. 3　豊かな自然と一体化した街並み

温泉街のメインストリート（写真-12）からは、湖や周囲の山並みを見通すことができず、不十分である。街路に街路樹はあるものの、人工的な印象がぬぐえず、自然の気配を感じるものとはなっていない。

写真-11　洞爺湖温泉の象徴景のひとつ：洞爺湖

写真-12　洞爺湖温泉街のメインストリート
（写真出典：Wikipedia）

写真-13　洞爺湖畔の遊歩道

5. 1. 4　景観に優れた適度な長さの散策路

景観に優れた散策路には湖畔の遊歩道（写真-13）が該当し得ると考えられるが、風景に変化が乏しく、散策に要する時間と比較して得られる風景体験は十分なものではない。

このことからは、これらの散策路には「景観に優れる」、「適度な長さ」以外にも「変化のあること」が要件として求められている可能性がある。

5. 1. 5　散策や滞留の拠点となる広場等

湖畔の親水公園全域が当てはまり得るが（写真-13）、広大ゆえに拠点的な場所に乏しく、また市街地とも離れている。

5. 1. 6　歩行者優先の街路空間

温泉街のメインストリートは、10m ほどの車道を持つ立派な街路で、歩道にも十分な幅員はあるものの車道で分断され「歩行者優先の街路空間」とはなっていない（写真-12）。

5. 2　小布施修景地区界隈：長野県小布施町

4.章の 6 つのパターンについて、温泉街以外の観光地にも適用を試行するため、全国的にも評価が高い、徒歩圏規模の独立性の高い観光地として長野県小布施市の小布施修景地区界隈（図-3）に照合して

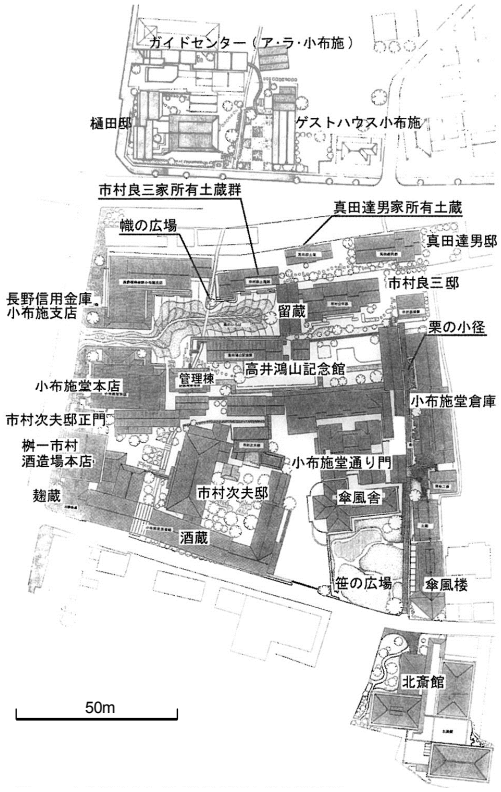

図-3　小布施修景地区周辺図（参考文献[12] より引用）

みる。

結果は以下のとおりで、前述の 6 つのパターンすべてに適合していた。

5. 2. 1　屋外での時間の過ごし方

散策や滞留の時間を増やす積極的な取組みとして「おぶせオープンガーデン」[13] が実施されている。また、修景地区内の美術館・記念館や土産物屋めぐりも人気である。

5. 2. 2　観光地のアイデンティティとなるような象徴景

栗の小径の風景があり、小布施文化観光協会のウェブページ（写真-14）やその他観光ガイド等で広く使われている。

5. 2. 3　豊かな自然と一体化した街並み

街並みに雑木や笹がさりげなく取り込まれ、長野盆地の豊かな農村の雰囲気が演出されている（写真-15、16）。

5. 2. 4　景観に優れた適度な長さの散策路

景観に優れた散策路には、栗の小径と北斎館を中心とした修景地区の界隈があり、栗の小径～修景地区の外周を 1 周で約 500m となる（図-3）。

5. 2. 5　散策や滞留の拠点となる広場等

北斎館と栗の小径が面する角に「笹の広場」があるほか（写真-15）、修景地区の各店舗の前面に設けられた小広場がこれらの役割を担っている。

5. 2. 6　歩行者優先の街路空間

北斎館前面の道路（写真-16）は、歩車の区分がなく、通過交通もないため、歩行者優先のゆったりとした雰囲気がある。「栗の小径」は歩行者専用であり、その他にも小さな路地のネットワークが随所にある。

ただし、修景地区の西と北についてはそれぞれ国道と県道で、歩車は分離されているものの、交通量も多く、落ちついて散策できる環境とは言いがたい。

写真-14　小布施の象徴景：栗の小径
（出典：小布施文化観光協会webサイト）

写真-15　小布施 笹の広場（出典：Google Map）

写真-16　小布施北斎館の前面道路

5. 3　パターンとの適合状況と考察

4.章の「6 つのパターン」と洞爺湖温泉街との適合を調査した結果（5.1 節）からは、洞爺湖温泉では「パターン」、すなわち「全国の 6 の温泉街から抽出された魅力的な滞在型観光地に求められる要件の候補」との一致が極めて少ないことが読み取れる。今回は割愛したが、登別、阿寒湖での調査結果も同様の傾向であった。実は、3.章の調査対象の 6 の温泉街のなかでも野沢温泉についてはこれら 6 つのパターンとの適合が少ないのであるが（表-3～8）、したがって国内の温泉街には「6 のパターン」への適合が多い観光地と、そうでない観光地が存在していることがわかる。観光地全体の魅力との関係については今後精査が必要と考えられるが、観光地の屋外公共空間の評価手法として一定の有効性が示されたものと解釈できる。

一方で、温泉街型以外の観光地（評価の高い徒歩圏規模の観光地）の代表としての小布施との適合の調査結果（5.2 節）からは、当該「6 つのパターン」は温泉街型以外の観光地にも適用の可能性があると

考えられる。

6. まとめ

本研究では、観光地の魅力向上に寄与する観光地の屋外公共空間のあり方について知見を得ることを目的とし、評価の高い国内のいくつかの温泉街型観光地の事例調査を行った。それらの観光地の共通点から、魅力的な滞在型観光地に求められる屋外公共空間の要件について候補の抽出を行い、以下の「6つのパターン」（仮説）として整理した。

① 屋外での時間の過ごし方の提供
② 観光地のアイデンティティとなるような象徴景
③ 豊かな自然と一体化した街並み
④ 景観に優れ変化のある適度な長さの散策路
⑤ 散策や滞留の拠点となる広場等
⑥ 歩行者優先の街路空間

続いて、これら「パターン」と実際の観光地の屋外公共空間の現状との適合状況を調査し、これらパターンの妥当性の検証と、観光地評価への適用可能性についていくらかの考察を行った。

これら「6 つのパターン」については、次章に示すような課題は認められるものの、観光地の屋外公共空間の評価手法の確立に向けた出発点としては、有益なものが得られたと考えているところである。

7. 今後の課題

今回抽出された「6 つのパターン」は、ごく限られた数の "温泉街型の" 観光地から抽出されたものである。したがって今後は、より多くの観光地事例の分析などを通じて、これらのパターンの普遍性や妥当性の検証、温泉街型観光地以外の観光地への適用可能性の検討、「パターン」の拡充などを進めていく必要がある。

また、抽出された「パターン」には、例えば「屋外での時間の過ごし方の提供」のように、抽象度の高いものや様々なバリエーションを含み得るものもあることから、今後はそれらの下位にあたるより具体・詳細の「パターン」についても検討していく必要がある。

加えて、「評価の高い観光地の屋外公共空間」とそうでない屋外公共空間を区分して抽出するための方法についても新たに考えていく必要がある。今回は、**表-1** に示した 3 つの情報を頼りに 6 つの観光地を抽出したが、これらはあくまで観光地の総体としての評価を反映していると考えられ、屋外公共空間だけの評価ではない。今回調査対象とした 6 の観光地のうち、野沢だけが×評価複数となったが、これには、屋外公共空間の魅力評価とそれ以外の部分の魅力評価の切り分けができていなかったことが一因にある可能性がある。

参考文献

1) 観光庁（平成 24 年 3 月 30 日閣議決定）：「観光立国推進基本計画」、2012 年、http://www.mlit.go.jp/kankocho/kankorikkoku/kihonkeikaku.html
2) 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議：「明日の日本をさせる観光ビジョン ー世界が訪れたくなる日本へー」、p.10、2016 年、http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kanko_vision/
3) 北海道局／北海道開発の将来展望に関する有識者懇談会：「北海道開発の将来展望に関するとりまとめ」、p.3、2014 年、http://www.mlit.go.jp/hkb/hkb_tk7_000055.html
4) 室谷正裕：「観光地の魅力度評価 ー魅力ある国内観光地の整備に向けてー 」、運輸政策研究 Vol.1 No.1、1998 年、http://www.jterc.or.jp/kenkyusyo/product/tpsr/bn/no01.html
5) 国土交通省（平成 28 年 3 月 29 日閣議決定）：「北海道総合開発計画」、pp.33-34、2016 年、http://www.mlit.go.jp/report/press/hok07_hh_000088.html
6) C・アレグザンダー他著（平田翰那訳）：「パタン・ランゲージ［環境設計の手引］」、鹿島出版会、1984
7) Michelin Apa Publications Ltd. :「The Green Guide JAPAN」、2012 年
8) 株式会社リクルートライフスタイル：「じゃらん人気温泉地ランキング 2015 投票結果報告」、2014 年、http://jrc.jalan.net/j/surveys.html
9) 旺文社：「ことりっぷ」
10) 黒川温泉観光旅館協同組合：入湯手形とは？、https://www.kurokawaonsen.or.jp/free/free.php?intFreeKey=6&intKKey=3
11) 新谷洋二、越澤明監修：都市をつくった巨匠たち、ぎょうせい、2004 年
12) 川向正人：「小布施 まちづくりの奇跡」、新潮社、2010 年
13) 小布施町：オープンガーデン、http://www.town.obuse.nagano.jp/site/opengarden/

STUDY ON TECHNIQUES FOR EVALUATING OUTDOOR PUBLIC SPACES TO DEVELOP INTERNATIONALLY COMPETITIVE TOURIST DESTINATIONS

Budged : Grants for operating expenses
-- General account
Research Period : FY2015 - 2018
Research Team : Scenic Landscape Research Unit
Author : KASAMA Satoshi,
MATSUDA Yasuaki,
OGURI Hitomi, YOSHIDA Satoshi

Abstract : Improving the attractiveness of tourist destinations is indispensable to the further promotion of tourism in Japan. This study is mainly aimed to clarify the conditions of the "outdoor public spaces" that are required for tourist destinations to be attractive. And by applying these conditions, we intend to make possible identify the issues related to each tourist destinations and to support planning development and improvement of such public spaces. Consequently, we aim to contribute to the development of world-class tourist destinations throughout Japan.

For this purpose, in FY2015, we conducted a field survey on outdoor public spaces at several Japanese Onsen villa styled tourist destinations gaining some or more popularity in Japan. Through the survey, we extracted "patterns" that are common to those outdoor public spaces and labeled those "patterns" as a potential factor contributing to the attractiveness of each tourist destinations.

In this paper, we report on the outline of the survey and the six "patterns" extracted from the survey.

Keywords : tourist destinations, tourism promotion, attractiveness, outdoor public spaces, landscape development, Pattern Language